

明治末期から昭和三〇年代まで活躍した川瀬巴水という版画家が存在する。総数六〇〇点にもなる木版による版画を制作しているが、一部例外はあるものの大半は日本国内の風景を綿密に描写した作品である。それらは東京など都会の風景や各地の自然の景観であるが、共通する特徴は現代では発見できない風景、すなわち近代の日本が発展してきた過程で喪失した風景ということである。

一例として、静岡の興津の海岸の家並から駿河湾越に遠方の山並みを眺望した作品があるが、現在では鉄道と道路が何本も海岸に建設され、版画の風景は見当たらない。東京の六郷から矢口にかけての多摩川沿いの光景を描写した作品には緑色の自然護岸の前面を小舟が悠々と通過していく風景が展開するが、現在では背景に林立する高層住宅ともかく、灰色のコンクリートで建設された堤防が見渡せるだけである。鉄道も道路も高層住宅も人工護岸も、明治時代以来、日本が工業国家として発展してきた過程で必要とされた施設であり、喪失した風景を現在の視点から懐旧の気持で批判することはできないが、人口が減少しはじめ、工場は海外に移転しはじめた現在では、同様の事態の再現は慎重に見直す必要があるはずである。ところが実際には、依然として土建国家ともいべき現実が進行している。

二年半前の津波で家屋を喪失した三陸海岸の友人が、津波が襲来した防潮堤防の内側の敷地を放棄して、海上を見渡す高台に新居を建築したというので、九月に御祝いに出掛けた。その帰路、かつての敷地のあった宮古郊外の田老地区を訪問した。被災直後には、瓦礫が氾濫していた堤防の内側も片付けられ、雑草の繁茂する空地になり、田老の万里の長城と揶揄された防潮堤防のみが当時を想起させる状態で残存していた。

背後の丘陵地帯で進行している高台移転のための宅地造成の工事を遠望しながら堤防に接近していくと、その足元の看板に今後の工事予定が掲示されていた。水圧で七〇センチ沈下した堤防を嵩上げすることはともかく、これまで以上の規模の防潮堤防を沖合に建設するという説明である。津波で壊滅した低地には建物の建設は禁止され、市側が買上げる予定であるから、この二本の堤防が防御するのは公園になる空地でしかない。

そこで調査してみると、津波で被害のあった岩手、宮城、福島の子三県の海岸に八千億円以上の費用を投入して合計約三二〇億円の防潮堤防の建設が構想されているのである。もちろん岩手県普代村のように、防潮堤防の効果で無傷であった集落も存在するから、すべてが無用ということではないにしても、直線距離で約四二〇キロメートルの子三県の海岸の八割の延長の堤防が建設される。平成の万里の長城である。

この異常な構想には様々な疑問がある。多数の地域で高台移転が推進されている一方、海岸の低地を防潮堤防で防御する二重投資という疑問、三〇年間に一二〇〇億円を投入して建設された釜石湾口防波堤防が津波で海底の藻屑となったように、自然の猛威に効果を発揮するかという疑問、コンクリート堤防の寿命は六〇年程度であるのに、百年に一回の津波に役立つかという疑問など、問題は山積みである。

さらに三陸復興国立公園に指定された白砂青松の海岸や勇壮な岩壁の景観は消滅し、自然の循環は阻害される。現在では想像できないが、釧路湿原全体を干拓する構想は、わずか四〇年前の提案である。人間の見通し能力はその程度でしかない。今回の経験で、迅速に警報を発信し、住民が逸早く避難することが最大の防御であることは明白である。国土強靱は脆弱な人工の施設で自然を破壊することではないと理解すべきである。